加藤久雄先生近影

加藤久雄先生を送る

前田広幸

奈良教育大学長加藤久雄先生は、令和四（二〇二二）年三月末日をもって二期目の任期満了につき学長を離任されることとなりました。先生は昭和六二（一九八七）年一〇月に奈良教育大学に着任され、国語学分野の教員として、国語教育講座を研究と教育の両面から支えてくださいました。と同時に、三四年半の長きにわたり奈良教育大学の発展のため一貫してご尽力くださり、情報センター長、評議員、副学長（国際交流・地域連携担当）等をご歴任後、平成二七（二〇一五）年一〇月からは六年半の間、学長の任にあたられました。奈良教育大学国文学会はここに感謝の気持ちを込め、ご退任記念号を刊行いたします。

日本語学分野での先生のご業績は、本号掲載のご業績目録に詳しく示されているとおりでありますが、方言の記述・分析、語彙・意味の理論的分析、あいさつ言葉、複合名詞、数量詞、相対名詞、程度副詞、文法指導をはじめ、多方面でその成果を発表されています。先生のご論考を読むだけでなく、直接お目にかかる機会がはじめてあったのは、研究会においてだったと記憶しています。そこではご論考同様、課題を解決すべく綿密に計画された調査の結果をもとに、明らかになったことを、ぜい肉をそぎ落として核心を突き、ピンポイントでご発表されていたこと、強く印象に残っています。先生の研究室、あるいはセンター長室や副学長室、学長室をたずねると、いつもきれいに整頓されていて、日々増えてくる資料やものの一部に対し新たな場所が与えられると同時に、それまであった資料やものの一部がそこからなくなるプロセスに接し、言語研究でまま批判的に語られる「タクソノミー（分類法）」に関し、最適なあり方の絶え間なき追求過程としての意義を再認識させられ、研究と日常いずれの活動にも通底する姿勢を目にすることがしばしばありました。学生や同僚に対してはあたたかく接してくださるのが常ですが、教育や大学のあり方に対する理想を心の中であつくお持ちであることから、そこから外れることがあった場合には、厳しいお言葉が発せられる場面に接することも時にありました。

令和四（二〇二二）年四月からも引き続き、特任教授としてＥＳＤ・ＳＤＧｓセンターの仕事にあたられ、また奈良教育大学顧問として、大学教育にかかわる重要な施策について、新学長にご進言、ご助言いただくことになります。まだまだお忙しい日々が続くことかと存じますが、どうぞ先生が今後ともお元気でご活躍くださいますよう、心よりお祈りもうしあげます。長い間本当にどうもありがとうございました。